2013

学校法人　四條畷学園
平成２５年度 事業報告書

Ver. 1. 7

目　次

１．法人の概要　２

建学の精神
教育理念
教育方針
沿革
設置する学校・学部・学科等
学校法人の組織構成図
学校・学部・学科等の入学定員、学生・生徒・児童・園児数の概要
役員・教職員の概要
（１）理事会　（２）評議員会　（３）教職員数

２．事業の概要

法　人　９
大　学　１１
短期大学　２１
高等学校　２７
中学校　３０
小学校　３４
幼稚園　３８

３．平成２５年度決算の概要　４３

消費収入について
消費支出について

１．法人の概要

■建学の精神

報恩感謝

本学園は、牧田宗太郎、環兄弟によって大正１５年（１９２６年）に設立されました。兄弟は、自分達が教育界・実業界で世の役に立つことができたのは厳しい中にも慈しみ深い愛情をそそぎ、教育してくれた母がいたからこそだと、母への感謝と敬愛の念をつねに胸に深く抱いていました。

そして、母に対する報恩の心を表すために、史情豊かな四條畷の地を選び、ここに教育の理念を実現させるべく学校を建てようと念願されました。このようにして本学園の母体となった四條畷高等女学校が設立され、母に対する報恩感謝の念が具現化されたのです。

この至純なる精神は、本学園建学の精神として後世に引き継がれ、今日の総合学園に至る発展の歩みを支えるものとなっています。

（この説明文は本館の前にある創立者牧田宗太郎先生、牧田環先生のレリーフ碑に記載された文章をもとに作成しました。）

■教育理念

人をつくる

教育の目的は人をつくることであり、人をつくることは、徳、知、体三育の偏らざる実施とその上に立つ品性人格の陶冶に依ってのみ可能です。

・実践躬行
　品性人格は、単に知識を身につけるだけではなく、身を以て実際に行うことにより習得されます。
・Ｍａｎｎｅｒｓ　ｍａｋｅｓ　ｍａｎ
　礼儀正しい行いを身につけることが、人として成長し、品性人格の備わった人になることにつながります。

（これは、四條畷高等女学校の教育方針の前文と本館の飾り煉瓦にある牧田宗太郎先生が自ら刻まれた言葉から構成しています。）

■教育方針

個性の尊重
個々の人が持つ異なる性格と特色ある才能とを尊重し、これを画一化することなく、それぞれの天賦の才能を探求し、発揮させます。

明朗と自主
自分たちの未来を信じて、明るく朗らかで、何事にも自主的、積極的に取り組む人を育てます。

実行から学べ

知識は実践を伴ってこそ価値があることを知り、「知って行い、行って知った」という課程を通じて学ぶ人を育てます。

礼儀と品性

礼儀と礼節を重んじ、自らの教養を磨く、品性豊かな人を育てます。

（高等女学校設立当時の教育方針を尊重し、「個性の尊重」「明朗と自主」「実行から学べ」に「礼儀と品性」を追加しました。設立当時は四点目が「貞淑にして温雅」ですが、今の時代にあわせた表現に変更しました。）

■沿革

大正１５（1926）年　４月　　四條畷学園高等女学校開校（古川橋）

昭和　４（1929）年　６月　　本館竣工（現在も使用中）

昭和１１（1936）年１０月	創立１０周年記念祝賀会開催
昭和１６（1941）年　４月	幼稚園開園
昭和２２（1947）年　４月	四條畷学園中学校（新制）開校
昭和２３（1948）年　４月	四條畷学園高等学校（新制）開校
	四條畷学園小学校（新制）開校
昭和３９（1964）年　４月	四條畷学園女子短期大学開学（家政科）
昭和４２（1967）年　２月	創立４０周年記念　新体育館兼講堂竣工
昭和４７（1972）年　４月	四條畷学園女子短期大学家政科を児童教育学科に転科
昭和５１（1976）年１１月	創立５０周年記念式典挙行

平成　３（1991）年　４月	臨床心理研究所（ＩＣＰ）設置
平成　８（1996）年　８月	創立７０周年記念行事挙行
平成１２（2000）年　４月	四條畷学園女子短期大学から四條畷学園短期大学に改称
平成１３（2001）年　４月	四條畷学園短期大学リハビリテーション学科開設
平成１６（2004）年　４月	四條畷学園短期大学ライフデザイン総合学科開設 リハビリテーション総合研究所設置
平成１７（2005）年　４月	四條畷学園大学（リハビリテーション学科）開学
平成１８（2006）年　５月	＜創立８０周年記念行事＞ウィーン少年合唱団と四條畷学園少年少女合唱団ジョイントコンサート開催
１０月	四條畷学園短期大学清風学舎竣工

平成１９（2007）年　４月	四條畷学園短期大学介護福祉学科開設
平成２１（2009）年　１月	幼稚園ヨコミネ式保育開始
平成２２（2010）年　４月	中学校 六年一貫コース新設 全学同窓会事務局設置（短大清風学舎内）
平成２３（2011）年　４月	全学同窓会誌「若楠会報」第１号発行
５月	全学同窓会名簿発行
平成２４（2012）年　４月	短期大学ライフデザイン総合学科総合福祉コース開設
１０月	第二飯盛嶺校舎（高等学校・中学校）竣工

平成２５（2013）年１２月	幼稚園仮園舎竣工（翌１月～使用）

■設置する学校・学部・学科等（平成２５年５月１日現在）

（１）四條畷学園大学　　学長：河井　秀夫
　　学部　　リハビリテーション学部
　　学科　　リハビリテーション学科

（２）四條畷学園短期大学　　学長：河井　秀夫
　　学科　　保育学科
　　ライフデザイン総合学科
　　ライフデザイン総合学科　総合福祉コース
　　（介護福祉学科）

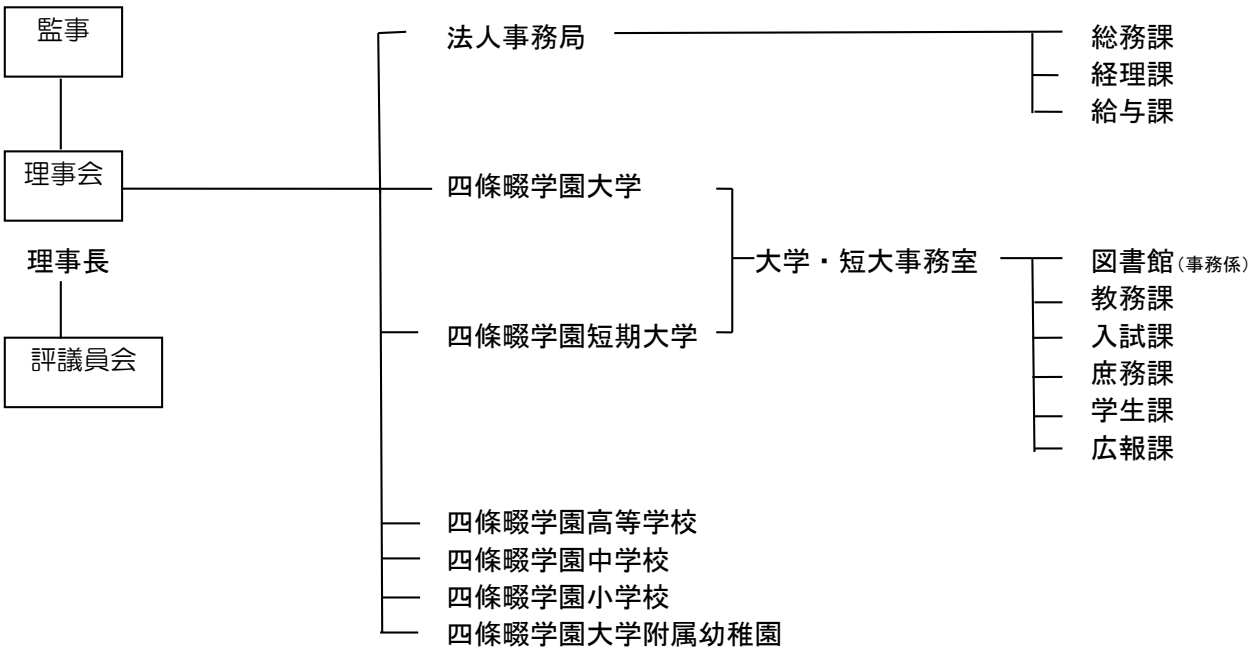
（３）四條畷学園高等学校　　校長：八木　健一

（４）四條畷学園中学校　　校長：淀　　廣治

（５）四條畷学園小学校　　校長：北田　和之

（６）四條畷学園大学附属幼稚園　　園長：中西　邦枝

■学校法人の組織構成図（平成２５年５月１日現在）



■学校・学部・学科等の入学定員

学生・生徒・児童・園児数の概要（平成２５年５月１日現在）

校　園	学部・学科名等	定員		現員						合計		
		入学定員	収容定員	１年	２年	３年	４年	５年	６年	２５年度	２４年度	前年比増減
大　学	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部 ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学科 理学療法学専攻	40	160	46	44	38	62			190	190	0
	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部 ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学科 作業療法学専攻	40	160	35	35	40	27			137	124	+13
	合　計	80	320	81	79	78	89			327	314	+13
短期大学	保育学科	100	200	99	115					214	219	▲5
	ライフデザイン総合学科	100	200	55	78					133	160	▲27
	同総合福祉コース	25	50	18	24					42	25	+17
	介護福祉学科	－	－	－	1					1	20	▲19
	合　計	225	450	172	218					390	424	▲34
高等学校	―	*480	1,680	519	514	444				1,477	1,398	+79
中学校	―	*170	600	192	192	183				567	545	+22
小学校	―	*90	648	102	102	95	100	99	93	591	584	+7
幼稚園	―	*125	405	137	135	135				407	405	+2
合　計	―	1,170	4,103	1,203	1,240	935	189	99	93	3,759	3,670	+89

＊高等学校、中学校、小学校、幼稚園の入学定員欄は募集定員を示します。

■役員・教職員の概要

（１）理事会（平成２５年５月１日現在）

■理事　定員：６人以上９人以内　　現員：９人　うち外部理事（＊）：２人

理事長	川﨑　博司	
理　事	清澤　　悟	＊
理　事	伊泊　規子	＊
理　事	河井　秀夫	
理　事	石村　哲代	
理　事	髙山　光夫	
理　事	牧田　朝美	
理　事	木寅　文雄	
理　事	日笠　　賢	

■監事　定員：２人　　現員：２人

監　事	田中　脩雄
監　事	佐藤　多加志

（２）評議員会（平成２４年５月１日現在）

■評議員　定員：１３人以上３２人以内　現員：２４人

第１号評議員：　２人（１人以上３人以内）（法人職員）
尾村　和彦、中橋　健司

第２号評議員：　２人（１人以上３人以内）（卒業生）
牧田　朝美、大西　寛治

第３号評議員：１９人（１０人以上２５人以内）（学識経験者）
清澤　　悟、伊泊　規子、三村　龍三、繁原　秀孝、横田　将憲、
米原　信夫、山内　康俊、小南　市雄、梶尾　晃
河井　秀夫、森永　敏博、石村　哲代、髙山　光夫、淀　廣治、
北田　和之、中西　邦枝、木寅　文雄、日笠　賢、渡邊　忠夫

第４号評議員：　１人　（１人）（理事長）
川﨑　博司

（３）教職員数（平成２５年５月１日現在）

校　園		教員				職員等					合計
		本務	常勤	嘱託	兼務	本務	嘱託	兼務	理事	監事	
大学		23		3	20	4	2	4			56
短期大学	保育学科	8		1	30	3	4	3			49
	ライフデザイン総合学科	4	1	4	31	3	7	15			65
	介護福祉学科	4			2	1	1				8
	音楽教室			1	10						11
	合計	16	1	6	73	7	12	18			133
高等学校		64	2	11	48	7	8	26			166
中学校		39	2		10	2					53
小学校		28	1	1	8		1	7			46
幼稚園		14	1	4	4		1	32			56
法人本部						1		1			2
学外理事等									3	2	5
合計		184	7	25	163	21	24	88	3	2	517

２．事業の概要

当年度に実施した主な事業

■法人

（１）重点取り組み事項

①看護学部の新設について

大学内に看護学部設置準備室を設置し、平成２７年４月開設に向け、文部科学省宛申請の体制を構築しました。

②幼稚園園舎の建て替えについて

安全性と利便性を勘案し、四条畷駅から近い旧園舎と同じ場所に建て替えることにしました。建て替え期間中は小学校の校庭に建築した仮園舎を使用して従来通りの保育を継続しています。仮園舎でも保育の質を維持･向上させるため旧園舎よりも広い保育室等を用意しました。新園舎は平成２７年３月竣工予定ですが平成２７年２月より使用を開始する予定です。

③寄付金募集体制の整備について

平成２６年４月より創立９０年記念の寄付金を募集できるよう当学園の支援者をメンバーとする委員会を組織し、寄付金を募集する体制を構築しました。

④創立９０周年記念事業の実施について

平成２８年度に迎える創立９０周年の記念事業を推進するため全学同窓会長を委員長とする記念事業推進委員会を組織しました。この委員会を中心に、記念式典、音楽祭、寄付金募集、９０周年記念誌編纂、「友の会」の発足・会員募集などの記念事業の推進に着手しました。

（２）教育・研究環境の充実

学生・生徒・児童・園児がより良い教育を受けることができるよう、また教職員がより良い指導ができ、またより充実した研究ができるよう以下のとおり環境の整備・充実に努めました。

①建物・設備等

(a) 幼稚園　　仮園舎建築（広い保育室、廊下等装備）
(b) 小学校　　放送設備更改、書道教室（「和洋館」）建築、集会室床補修
(c) 高等学校　　本館・総合ホール間渡り廊下設置
(d) 大学　　外壁タイル
(e) 共通　　学園町キャンパス道路側鉄柵塗装

②情報化の推進、ＩＴインフラ・装備の充実

(a) 大学　　ホームページ全面リニューアル
(b) 短期大学　　ホームページ全面リニューアル
(c) 共通　　WidnowsXP パソコン更改完了（学生・生徒・児童、教職員）

（３）災害対策への取り組み

地震等の災害時に学生・生徒・児童・園児、教職員の帰宅困難を想定した防災備品の備蓄と、ヘルメットの装備等を開始しました。

（４）経営管理機能の強化

①危機管理委員会の充実

学園の全校園長をメンバーとする危機管理委員会においてヒヤリハットを含むリスク事案の情報等を共有する仕組みを構築しました。
再発の防止、類似事案発生時に迅速な対応を図ることを目的としています。

■大学

（１）重点取組事項

①看護学部の設置（平成 27 年 4 月開設に向け設置計画中）

平成 27 年 4 月に看護学部看護学科（仮称）を新設すべく準備を進めています。

(a) 看護学部については、平成２７年４月の新規開設に向け、看護学部設置準備室を設けて精力的に取り組みました。入学希望者に関し、事前に実施した高校生向けアンケートでは、近隣の学校を中心に、多くの入学希望をいただきました。また、卒業生の採用に関する病院・施設向けのアンケートでは、大変多くの採用希望の返事をいただくことが出来ました。

(b) 設置計画の概要（予定）

設置時期	平成27年4月
設置学部・学科	看護学部看護学科（仮称）
定員	入学定員80名
学舎場所	大阪府大東市学園町（ＪＲ四条畷駅前）

②国家試験合格率の向上

平成２６年３月の国家試験合格率の結果は、全国平均を大きく上回りました。

(a) 平成２６年３月３１日に発表された、理学療法士国家試験及び作業療法士国家試験では、四條畷学園大学の新卒者はいずれも１００％合格、既卒者を加えた場合でも、理学療法士国家試験が９６％、作業療法士国家試験は１００％という結果となり、全国平均を大きく上回るとともに、昨年度よりもさらに高い合格率を得ることが出来ました。

(b) 第４９回理学療法士国家試験、作業療法士国家試験合格状況（平成２６年３月３１日）

	受験者	合格者	合格率	前年度
理学療法士国家試験	25	24	96%	92%
うち新卒者	24	24	100%	97%
作業療法士国家試験	18	18	100%	79%
うち新卒者	14	14	100%	80%

	本学　（前年度）	全国平均　（前年度）
理学療法士国家試験	96%　（92%）	84%　（89%）
うち新卒者	100%　（97%）	90%　（94%）
作業療法士国家試験	100%　（79%）	86%　（77%）
うち新卒者	100%　（80%）	94%　（87%）

③学生募集力の強化

平成２６年４月の入学者は、前年度を大幅に上回りました。

(a) 平成２６年度入試においては、新たな試みとして四條畷学園同窓会特別入試を開始するとともに、社会人入試は従来の入試時期を大幅に繰り上げ、Ａ日程とＢ日程を設けて実施した結果、それぞれにおいて、受験者、合格者がありました。

(b) また、オープンキャンパスを強化し、広報活動を活発化する一方で、本学独自の奨学金制度や初年度特待生制度を拡充させる等の施策を講じた結果、推薦入試、一般入試、大学センター試験利用入試のいずれも、志願者が前年度に比べて大幅に増え、理学療法学専攻においては入学辞退者の比率が減りました。

(c) この結果、入学者は、理学療法学専攻が６２名（昨年４６名）、作業療法学専攻が３５名（昨年３５名）、合計で９７名となり、定員（８０名）を充足しました。

(d) 平成２６年度学生募集状況　（　）内は前年度

	志願者	合格者	入学者
理学療法学専攻	198（136）	77（65）	62（46）
作業療法学専攻	84（76）	48（42）	35（35）
合　計	282（199）	125（107）	97（81）

（２）教育内容・水準の充実

①新カリキュラム移行と看護学部設置準備へのカリキュラム見直し

(a) 新カリキュラムへの移行

A. 平成２２年度から進めてきたカリキュラム変更は、新カリキュラム移行への完了年度となりました。

B. しかしながら、休学者の中に、未だ旧カリキュラム対象者がいるため、次年度は旧カリ科目も並行して開講する予定です。

(b) 看護学部設置に伴うカリキュラムの見直し

平成２７年４月に設置計画中の看護学部の開設に合わせ、カリキュラムの見直し作業を行なっています。

②国家試験対策のための教育体制の充実

(a) 国家試験受験対策として、次の対策講座を実施しました。

A. 基礎講座（過去問題解答・解説講座含む）・・・１８コマ　３６時間
B. 模試実力アップ講座　・・・１２コマ　２４時間
C. 一週間集中講座　・・・１７コマ　３４時間
D. 下位グループ対策講座　・・・受験生のレベルに応じて必要な時間数

(b) 卒業生に対する研究生制度でのサポート

A. 国家試験合格が年々厳しくなる中、国家試験を再受験する卒業生に対して、現役生と同様の対策プログラムを適用し、合格率向上を図る研究生制度を設けています。

B. 研究生制度の利用により、基礎講座、集中講座の受講や、個別指導などの受験対策、図書館など大学施設の利用、模試への参加、出願手続きの支援などが受けられます。

C. 平成２５年度は、第４９回作業療法士国家試験において３名の研究生が合格を勝ち取ることができました。

③ＦＤ（Faculty Development）活動

(a) 学生による授業評価アンケート実施

A. 平成２５年度は、前期・後期ともに、学生による授業評価アンケートを実施し、ＦＤ委員会がそれらを取り纏め、「授業評価報告書」を作成しました。

B. 授業評価の分析と問題点の洗い出しを行ない、対策を立て、実行するという形で P->D->C->A サイクルをしっかりと回し、授業内容改善に取り組んでいます。

(b) FD 研修会の開催

平成２５年度は、新たにＦＤ研修会を開催し、授業内容改善に向けて、教員相互の情報共有を図りました。

(c) 講師会の開催による非常勤講師との意見交換

A. 昨年に引き続き、非常勤講師と全ての専任教員が一堂に会して、情報の共有と意見交換を行なう場として、３月に講師会を開催しました。

B. FD 委員会から授業評価アンケート結果の報告や、学年担任から専攻別・学年別の就学状況報告、また国家試験対策や就職状況などについても情報共有が図られるとともに、休学者や退学者対策に関して、活発な意見交換がされました。

（３）研究活動の充実

①外部の競争的研究費の獲得と学会発表

(a) 神経機能評価機器の活用による研究と学会発表

A. 理学療法学専攻の松木明好講師が、「小脳磁気刺激によって誘発される長潜時筋電図反応の解明」の研究テーマにより、外部の競争的研究費を獲得し、本学の神経機能評価機器を用いて行なった研究成果を、国内および国際学会で発表しました。

B. 神経系理学療法や生理学実習などの授業にもこの機器を活用し、研究・教育両面で質的向上を図りました。

(b) 三次元動作解析システム（Vicon）の活用による研究

理学療法学専攻の向井公一准教授は、大阪大学との共同研究により三次元動作解析システム（Vicon）を活用して「ＥＲ流体を用いた等速度運動装置」の効果検証を行ないました。

(c)動作分析のソフトウェアの活用による研究

作業療法学専攻では、平成２４年度に購入の「ダートフィッシュ」と呼ばれる動作分析のソフトウェアを、教員の研究だけでなく学生の卒業研究等にも活用しました。

(d)その他の外部競争的研究資金の導入

上記以外の外部競争的研究資金導入による研究では、平田孝教授による「緑藻由来特異カロテノイド、シフォナキサンチンの抗肥満作用とその機構解明」の研究と、「水産物由来カロテノイドの酵素的非対称解裂とその産物の生体調整機能発現作用機構」の研究、さらには、記村聡子講師による「過疎地域と都市の情報通信技術を活用した高齢者見守りネットワークに関する研究」が行なわれました。

（４）教育・研究設備

①医学文献入手環境の整備

(a)医学文献 Web 検索、閲覧サービス

平成２４年１１月から導入した医学文献検索サービスである医学中央雑誌 Web 版（国内医学文献の検索サイト）とメディカルオンライン（国内の医学系ジャーナル約１０２０誌の全文悦覧が可能）は、教員や学生の使用頻度も高く、教育・研究両面で効果が出ており、医学文献の入手という面での環境整備が大きく前進しました。

(b)北条図書館の平日開館時間延長

また、同じく平成２４年１１月から平日の開館時間を延長している北条図書館では、授業後に図書館に寄って帰る学生の増加を見ており、効果が出ています。

(c)副本化と電子書籍対応

A. 大学の学生の貸出ニーズの高い文献・資料については、利便性を考慮して、副本化を進めています。

B. 平成２４年度に試験的に購入した電子書籍（Maruzen e-book library）については、利点も確認できたことから、平成２５年度には追加で購入するとともに、今後もコンテンツを吟味しながら充実させていく方針です。

②授業の動画撮影と反復視聴環境整備

(a)授業の動画撮影と反復視聴環境の整備の推進

学生にとって反復視聴をすることが有効と思われる授業や、入学予定者への入学前教育講座に関して、本学教員の講義をビデオ撮影し、学内サーバー内への保存、ＤＶＤ化を行い利便性の向上を図りました。

③学舎、講義室、学生相談室の補修、拡充、整備

(a) 学舎の補修、整備

A. 学舎の外壁タイルに関しては、剥落の点検と補修を行なうと同時に、外装の塗替えや、近年の豪雨等に対応した雨漏り防止の補修などを行いました。

B. 歩行者、車椅子、通行車両の安全確保のために、キャンパス内にあった花壇跡部分を埋立て補修しました。

C. 学生ラウンジ、玄関、階段、踊り場、廊下などに関して、専門の業者による塵芥等の徹底吸引除去と清掃を行ないました。

(b) 講義室、パソコン教室の拡充、整備

A. 新入学生の増加に対応して、講義室のモニター画面の増設を行ないました。

B. また、授業に支障のないように、パソコン教室の拡充を行なっています。

(c) 学生相談室の改装

学生相談の増加に対応して、学生相談室の改装を行ない、利便性向上を図りました。

（５）社会貢献・文化活動の推進

①市民公開講座の開催

(a) ７月と１０月に市民公開講座を実施しました。

A. 本学のある大東市は、地域リハビリテーションを行政レベルで組織的に取り組んでいる自治体で、リハビリテーションへの関心度も高いところです。このような背景から本学では、毎年、「いきいき生きる」をメインテーマに市民公開講座を開催し、毎回多数の方々に参加いただいています。

B. 平成２５年度は７月と１０月に実施、併せて１３８名の方に参加いただきました。

・７月　:「知って賢く！制度とからだのつかい方」８１名参加
・１０月 :「いつまでも美味しく食べるために」５７名参加

②四條畷学園大学・臨床実習サポートセンターの開設と活動

(a) 四條畷学園大学・臨床実習サポートセンターの開設

臨床実習施設と本学との関係を双方向の関係にして、リハビリテーション技術のレベルアップを図ることを目的に、平成２５年度より四條畷学園大学・臨床実習サポートセンターを開設しました。

(b) 四條畷学園大学・臨床実習サポートセンターの具体的な活動

A. ５月には、新人理学療法士、新人理学療法士の指導者、臨床実習指導者を対象に、新人教育に資する臨床セミナーの開催をしました（平成２５年５月１０日、１５日、２１日、２４日、３０日の５日間、本学教員５名が講師：参加者計２１８名）。

B. 臨床実習施設からの文献取り寄せ依頼への対応や評価機器の貸し出し、本学教員の講師の派遣などを行ないました。（約３０件、平成２５年１２月末実績）

C. 平成２５年１２月１日には、四條畷学園 80 周年記念ホールにおいて、関西医科大学医学部教授・長谷公隆先生をお招きし、「運動学習理論に基づくリハビリテーションの実践」と題して、臨床リハビリテーションセミナー講演会を主催しました。（参加者１５２名）

③「なわてふれあい商工フェア」への参加

(a)「なわてふれあい商工フェア」へのブース出展と革細工体験コーナー設置

四條畷市商工会主催の「なわてふれあい商工フェア」においては、本学は毎年、ブース出展しており、平成２５年度は、四條畷市民の皆さまに作業療法の一つである「革細工」を実体験していただきました。用意していた革細工１００セットが２時間で「完売」するなど、好評を得ています。（教職員４名、学生８名が参加）

④模擬授業（出前講義）の実施や高校生のキャリア教育に対するサポート

(a) 四條畷学園高校との高大連携活動

本学では高大連携活動の一環として、四條畷学園高校の１年生、２年生、３年生に対し、毎年それぞれのレベルに合わせて模擬授業を行なうだけでなく、高校生のキャリア教育の一助として、医療職に関するガイダンスや、本学の施設見学を実施するとともに、本学の実習施設である病院等の見学もサポートしています。

(b) 外部の高校への模擬授業（出前講義）の実施

四條畷学園高校以外の高校に対しても、要請に応じて教員を派遣して、模擬授業（出前講義）を実施しています。平成２５年度には、大阪府下の高校を中心に、２０校程度で実施しました。

⑤大学施設の開放

(a) 四條畷学園大学・臨床実習サポートセンターの活動

従来同様に公益社団法人日本理学療法士協会や、大阪府理学療法士会、一般社団法人日本作業療法士協会、大阪府理学療法士会が実施する地域研修会や研究会の会場として、本学の教室および設備機器の提供いたしました。

（６）学生等募集対策

①学生募集力の強化

(a) 指定校推薦入試における見直し

学生募集対策の一環として、平成２５年度は、指定校推薦入試における評定平均値の見直しと、指定校数の拡大を行ないました。

(b) 四條畷学園同窓会特別入試の開始

また、重点取組事項にも記したとおり、平成２６年度入試においては、新たな試みとして四條畷学園同窓会特別入試を開始したところ、初年度から受験者・合格者があり、入学に繋がりました。

(c) 社会人入試の改革

社会人入試においては、従来１２月に実施していた日程を変更してＡＯ入試日程の時期に繰り上げ、Ａ日程とＢ日程を設けて実施するとともに奨学金制度を拡充した結果、それぞれの日程において受験者・合格者があり、入学しました。

(d) 一般入試の改革

一般入試においては、センター試験受験科目利用を含め、受験科目について受験者が得意分野を有利に生かせるような柔軟な選択肢を利用可能にした結果、受験者の増加がありました。

(e) 初年度特待生制度と大学独自の給付型奨学金制度の充実

A. 入試の成績に基づく初年度特待生制度や、返済義務の無い大学独自の給付型奨学金制度を充実させました。

B. その結果、推薦入試、一般入試、大学センター試験利用入試のいずれも、志願者が前年度に比べて増え、理学療法学専攻においては入学辞退者の比率が下がりました。

②広報活動の活性化

(a) 募集に繋がる広報活動の推進

A. 広報活動においては、四條畷学園高等学校の教員の支援も得て、募集対象高校への本学教員の訪問頻度を上げたことや、出前授業の実施、進学セミナーへの参加など、教職員総出で、活発に行ないました。

B. オープンキャンパスは、四條畷学園直営のレストラン「ビストロ北条」を利用し、参加者の好みに合わせたデザート類を提供しながら、本学学生と参加者との懇親を図った結果、平成２５年度の参加者は３４８名と、過去５年では最高の参加者数になりました。

③ホームページのリニューアル

(a)ホームページのリニューアル（スマートフォン、タブレット端末との同期化）

A. １１月に大学ホームページをリニューアルし、受験生の閲覧頻度の高くなっているスマートフォンと同期化させ、スマートフォンに適した情報構造に一新しました。

B. 旧ホームページと比較すると（同じ時期の１か月間）、ホームページ閲覧者数は、５，０３３から７，１８７へ、平均滞在時間は２分４３秒から３分３２秒になるなど、大きな改善を見ています。

C. ホームページをリニューアル直後に実施した入試の公募推薦Ｃ日程では、昨年度の２名から７名に増加しました。

D. また、ホームページと連動させたフェイスブックの利用で、鮮度の高い情報発信ができるようになりました。

④次年度の学生募集力強化に向けて

(a)オープンキャンパスの日曜日開催による一層の強化

A. 平成２６年度の学生募集においては、募集に直結するオープンキャンパスに関して、高校の夏休み期間中を除き、従来の土曜日開催から、日曜日開催に変更する計画を立てています。

B. 開催時間も、従来の午後からの開始を午前中からの開始に変更し、四條畷学園直営レストラン「ビストロ北条」で、デザートつきのランチを提供しながら、参加者と本学の学生、教員とが、じっくり話ができるような計画を立てています。

C. また、オープンキャンパスの日程の告知についても、四条畷駅と京橋駅の駅看板を利用することにしています。

(b)ＬＩＮＥへの対応

近年、高校生の利用頻度が急激に上がっていると言われているＳＮＳのひとつＬＩＮＥに公式アカウントを設けて、ホームページやフェイスブックとも連動させながら、情報発信を始めて行きます。

（７）就職支援

①学生の就職支援

(a)教職員による学生の就職支援

A. 就職状況については、現状は国家試験に合格さえすれば、ほとんど１００％就職できる状況ですが、学生個々人にとっては、自身の希望先に必ずしも就職できるとは限りません。

B. 就職指導は、担任教員を中心に、学生の希望や個性に応じた就職指導に取組んでいます。

C. 近年は面接で失敗する学生も少なくないため、実践的な面接指導も行ないます。

（８）その他

①リハビリテーション教育評価機構による第三者評価

(a) リハビリテーション教育評価機構による認証評価

A. 平成２５年度は、一般社団法人リハビリテーション教育評価機構による教育評価認定の受審をしました。

B. 書類審査と実地調査があり、実地調査では専攻毎に１１月と１２月に審査委員にご来学いただき、専攻責任者との面談や学内視察が行われ、３月には審査結果の通知がありました。

C. 理学療法学専攻の審査結果は、「本機構の定めたリハビリテーション教育に必要な施設基準およびカリキュラムを提供、実施できる養成施設として『認定』」をされ、「全ての評価基準を満たしている」との評価をいただきました。
（有効期間：２０１４年４月１日～２０１９年３月３１日）

D. 作業療法学専攻の審査結果は、「本機構の定めたリハビリテーション教育に必要な施設基準およびカリキュラムを提供、実施できる養成施設として『認定』」をされ、「全ての評価基準を満たしている」との評価に加えて、「特に優れた点」として、「学生教育に真摯に取り組み、切磋琢磨されている雰囲気が感じられ、申し分ない養成校である」とのコメントをいただきました。
（有効期間：２０１４年４月１日～２０１９年３月３１日）

E. 理学療法学専攻、作業療法学専攻のそれぞれの『認定書』は、大学リハビリテーション学舎の玄関に掲示しています。

(b) 日本作業療法士協会および世界作業療法士連盟（WFOT）の認定校の登録

A. 上記の結果、本学は一般社団法人日本作業療法士協会および世界作業療法士連盟（World Federation of Occupational Therapists ： WFOT）の教育基準を『満たしている』ものと『判定』されました。
（有効期間：２０１４年度から２０１８年度まで）

B. これにより、本学は、日本作業療法士協会の認定校として登録されるとともに、前身の四條畷学園短期大学リハビリテーション学科時代から継続して WFOT の認定校になり、作業療法士の世界標準の教育内容を持つ養成施設として認められています。

②日本高等教育評価機構の評価基準に沿った自己評価報告書の作成

(a) 日本高等教育評価機構による認証評価

A. 本学は、平成２４年度に日本高等教育評価機構による認証評価（再評価）を受審し、「日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしている」との評価を得ています。（認定期間は平成２２年４月１日から平成２９年３月３１日迄）

B. 平成２５年度は、日本高等教育評価機構の評価基準に沿う形で、平成２４年度の自己評価報告書を作成し、５月上旬にホームページに掲載しました。

C. 平成２５年度の自己評価報告書については、今般日本高等教育評価機構が定めた新たな評価基準に沿って作成し、５月中を目処にホームページに掲載の予定です。

■短期大学

（１）教育内容水準の充実

昨年度に、短期大学の各学科別の「教育目標」に基づいた「カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）」を明確に定めましたので、その方針に従い、学生一人ひとりを各学科・コースにおいて目標水準までレベルアップできるよう、教職員が一丸となって学生教育に取組みました。（「カリキュラムポリシー」については当事業報告書最終部分に掲載しています。）

保育学科では、昨年に引続き本学独自の特別講座である「ステージアップセミナー」の内容の充実を図るなど、どの分野にも通用する質の高い「なわてジェンヌ」の育成を目指しました。また、ライフデザイン総合学科では、特に、医療事務、秘書・オフィスワークおよびＩＴ（特に「医療事務関係」を強化）などの三つの各エリアを充実させ、他の短大、専門学校を陵駕するレベルにまで教育内容を充実しました。

さらにライフデザイン総合学科「総合福祉コース」では、介護福祉士の資格取得は勿論のこと医療事務、ＩＴなどにも精通した、どの養成施設でも育成できないような基礎能力の高い介護福祉士の育成を行いました。

「教育目標」レベルへの到達には、なかなか険しい道のりがありますが、次年度以降も引き続き教職員が一丸となって、学生教育に取組みます。

（２）教育環境の充実

①期初の予定通り、北条学舎パソコン第 1、第 2 教室のパソコンを最先端機種へと入替え、ライフデザイン総合学科学生のパソコンの技量に応じ、２教室を活用しての「習熟度別の授業」を実施しました。そして、学生のパソコン技量・能力等の一層の向上を図りました。

②ＧＰＡ（グレード・ポイント・アベレージ）の導入について

平成２５年度の入学生より、GPA 制度を導入し、学生の成績評価を４段階（優、良、可、不可）評価から、５段階（秀、優、良、可、不可）評価に変更しました。この制度は、個別の学生の学習指導に有効に活用したほか、卒業時表彰者の選定や奨学金対象者の選定などにも活用しました。

（３）教育研究基盤の整備

①教員が一丸となって、従来以上に学生教育に注力することや、教員がそれぞれの分野の研究（論文執筆、外部研究費の獲得など）に積極的に取組めるよう、事務室を中心として各種のサポート体制を構築しましたが、十分とは言えず、この体制構築は引続き次年度も課題とします。

②FD 活動の充実について

昨年同様、積極的なＦＤ活動を実施し、教員の教育能力を高め、授業改革などに組織的に取り組みました。その主なものは

(a)「入学時動機調査（４月の新入生を対象として、パソコンや携帯を利用し実施)」

(b)「学生による授業評価・個別の授業についての調査（前・後期末に個々の授業において学生による授業アンケートを実施)」

(c)「学生の授業についての満足度調査（短期大学の全体的な授業についての調査）１～２月にパソコンや携帯端末を利用し実施」および

(d)「教員相互による公開授業参観（前後期に１回ずつ実施)」

です。

そのうち(b)および(d)は本学のホームページにて結果を公開し、特に(d)については平成２４年度前期よりその結果を全面公開し、今年度についても全面公開しました。次年度以降も引続き継続して全面公開する予定です。

（４）社会貢献文化活動の推進

各学科とも昨年度に引続き、以下に記載するような様々な地域貢献文化活動を実施しました。

①保育学科

昨年度に引き続き、９月２１日に、本学客員教授、長谷川義史氏の講演および本学専任教員の専門講座をメインとした「スキルアップなわて保育学講座（大阪府社会福祉協議会保育部会後援)」を近隣の幼稚園、保育園などの先生方を対象に開催しました。

また、音楽研究室では、今年度も２回、多種多様な音楽を通じ、幼児からご高齢の方々にまでお楽しみ頂ける「グリムコンサート」を開催しました。このコンサートは地域の皆様に支えられ、延べ１９０回の開催となります。

②ライフデザイン総合学科

期初の計画どおり、前後期とも、地域の皆様を対象とした「社会人リフレッシュ講座」を開設し、「アロマセラピーの魅力」「やさしいパソコン」「食の安全性」「くらしの陶芸」などの講座を定例的に開講するとともに、特別授業として「料理のプロによる料理教室」や「夏休み親子陶芸教室」などを開講しました。

③ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」

今年度は都合により、公開講座の開講は見送りました。次年度は「認知症の理解」「介護技術について」などをテーマとした市民公開講座を開講し、地域住民の方々に、高齢社会に対応するための様々なアドバイスを行う予定です。

（５）学生募集対策（内部進学者を含めた学生募集対策）

保育学科、ライフデザイン総合学科、ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」ともに学科、コースの入学定員を確保し、入学定員２２５名以上の学生の入学を目指しましたが、入学生の合計は２１２名となり、１３名の定員未達となりました。【入学定員・保育１００名（入学実績１１３名）、　ライフデザイン総合１２５名（うち「総合福祉コース」２５名）、入学実績ライフ全体９９名（うち「総合福祉コース」１８名）】

①四條畷学園高校からの内部進学者について

学園高校からの短期大学への内部進学者は、１３５名を目指しましたが、保育　６２名、ライフデザイン総合　５０名、「総合福祉コース」９名、の合計１２１名（１４名未達成）に止まりました。

目標達成のため、今後、短期大学では、従来以上に、校長をはじめとする学園高校教員と緊密な連携と情報交換を行い、生徒のみならず先生方にも短期大学の持つ魅力をＰＲし、１名でも多くの内部進学者を増やしたいと考えています。(「模擬授業」や「短期大学ガイダンス」などの回数を増加し、短期大学により親しみを感じてもらえるような募集企画を増やします。)

②外部高校からの入学者の増加対策について

９０名以上の生徒を入学させる目標に対し、９１名の学生の入学があり、期初の目標は達成しました。　目標が達成できた要因として、

(a)オープンキャンパスの内容をより充実させて、目標とした４００名以上の生徒や保護者の参加があったこと。

(b)ホームページ（スマホなど）による本学 PR の強化したこと（本学の動向、オープンキャンパス情報、入試情報などを的確に伝達したこと。)。

(c)専任教員による本学近隣親密高校への訪問を強化したこと。(昨年度は約１００校程度でしたが、今年度は１５０校程度(複数回の訪問も含め)に訪問学校数を増加しました。)

(d)各高校などからの要請に応じて開催される業者主催の「進学説明会」に積極的に参加したこと、

などがあげられます。

しかしながら、外部高校からの学生の入学者数は目標以上であったものの、入学定員では１０名強の未達であり、内部学園高校からの進学者増加対策に加え、「総合福祉コース」の入学者増を含めた、外部からの入学生増加策を、上記の(a)～(d)を中心として、次年度以降さらに強化していく必要があります。

なお、平成２７年度から、入学定員は、保育１００名、ライフ１００名（うち、「総合福祉コース」２０名）と、合計２００名となります。

（６）就職対策

短期大学への入学生は、近年は特に「出口」である「就職実績（就職率の高低）」に強い関心を有しており、短期大学も学生の就職には特に注力して就職率の向上に取組みました。その結果、保育学科は、期初の目標で、就職希望者の１００％の就職を目指したところ、結果は９８．３％とほぼ目標を達成、ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」は昨年と同様、就職希望者の全員が就職し、就職率１００％を達成しました。

ライフデザイン総合学科は、いまだ経済・景気の低迷という社会的にも大きな要因があり、昨年度と同様かなり厳しい現実と直面しましたが、特に以下①～②の施策等を実施し、就職希望者の９３％の学生が就職することが出来ました。

①「短期大学就職委員会の教職員」と昨年度に設置した「キャリア相談室の職員（キャリアアドバイザー）」間の情報交換を常日頃から十分に行い、その両部門が協同して、学生の就職意欲・社会適応力および全般的な基礎能力を向上させました（特に、ライフデザイン総合学科の強化エリアに関する様々な課題についても情報を共有し、学生の就職指導にも反映させました）。

②キャリア形成に関する内容を授業科目として位置付け、１年次から「就職指導」を開始しました。そして、学生には就職し働くことが何故必要なのか、就職への意識付けや動機付けを十分に行い、また同時に学生本人の特性に応じた具体的な進路計画についても指導を徹底しました。

さらに学生に対し、「企業が取上げてくれるようなエントリーシート作成方法の指導」や「模擬面接」などを繰返し行うとともに、「インターネットなどによる会社概要の検索・把握」も抵抗なく行えるような具体的な指導なども行い、「就職」をより身近なものとして捉えさせ、就職に対するモチベーションの向上を図りました。

③「公務員試験対策講座」の開講について

昨年度に引き続きプロによる「公務員試験対策講座」を開講し、学生の基礎学力向上を図るとともに、公務員試験合格者の増加を目指しました。（今年度は１名のみですが地公体に合格し、就職しました。）

④滋慶学園グループと教育提携（コラボレーション）強化について

平成２６年度からの入学生を対象とし、滋慶学園グループの教育提携（コラボ）により、ライフデザイン総合学科に「パフォーミングアーツエリア」を新たに開設しました。このエリアは、バレエ、ＨｉｐＨｏｐ，ＪＡＺＺ，ＳＴＲＥＥＴなどのダンス・音楽系分野（合計５６単位）を本格的に修得ができるように企画されたものであり、所定の単位を取得したものは、本学卒業後、「大阪ダンス＆アクターズ専門学校」２年次に編入（短大と専門学校を３年で卒業できる）が可能であり、将来はそのような専門分野への就職も可能としました。そしてこの新エリアは、平成２６年度の学生募集にもＰＲ手段として活用しました。

今後、滋慶学園とは、「医療事務」や「製菓の分野」においても、さらに一層の提携を深めていく予定です。

⑤キャリア相談室職員（特に就職専担者）による近隣優良企業の訪問活動実施は、十分にできたとは言えず、継続的課題として取組み、より一層本学の PR を強化し求人要請を行います。

（７）災害対策への取組

①短期大学の教職員全員が、常日頃より「学校法人四條畷学園　危機管理マニュアル」の内容を十分に理解し、自然災害、火災、重大事故・事件等の危機といわれる事態が発生の際、的確な対応、処理を行えるように、また被害およびその影響を最小限に抑制する管理体制を確立できるように、啓発活動等に注力しました。

②消防避難訓練の実施について

平成２５年１１月１８日、大東市消防署の指導の下、北条学舎において消防避難訓練を実施しました。このような訓練は、次年度以降も定期的に実施する予定です。

＜参考資料＞

★短期大学・各学科・コース別カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針、教育目標）

☆保育学科

・社会人として幅広い視野と保育に関する基本的な知識・技能を獲得する。

・保育者としての実践力を獲得するため、保育の専門的な方法論と知識を体系的に学ぶ教科科目および教職科目を履修させる。

・子どもの情操教育に関する技能と感性を身につけるため、音楽・造形・身体表現の学習および研究を実践的に積み上げ、統合していく参加型の授業を受講させる。

・身につけた専門的知識・技能を活用し、自ら保育の課題を見出し解決していく能力や姿勢を育てる。そのための手段として卒業ゼミを特別研究科目とし、必修科目として履修させる。

・現代社会の様々なニーズに対応するため、保育の近接領域に関する資格取得を支援する科目を履修させる。

☆ライフデザイン総合学科

・次の３つのフィールドを設置する。基本的な知識・スキルを身につけることを目的とした基礎教育フィールド、現代社会を生きるための就業力を身につけることを目的としたキャリア教育フィールド、個々人に適したライフデザインを探求することを目的とした専門教育フィールド。
・基礎教育フィールドでは、学科の学生全員が共通して獲得すべき基本的な知識・スキルを学習するため、言語やマナー、人文教育、くらしと健康に関わる科目を履修させる。

・キャリア教育フィールドでは、問題解決能力の向上を目指し、あわせて協働の力を高める科目を設置する。情報を収集し、分析し、人々と協力しながら、能動的に問題解決する力を身につけるため、グループ学習や討論を中心としたアクティブラーニングを行う。

・専門教育フィールドでは、幅広く専門的知識を学べるエリアを設置する。それぞれのエリアでは専門的知識を深めるのみにとどまらず、資格取得を奨励し、各種検定資格合格のための支援科目を履修させる。

・全てのフィールドを通じて、社会の変化に対応した学習内容を提供することで、生涯を通じた向上心と、自分をとりまく現代社会への探究心を涵養する。獲得した知識・スキルをもとに、卒業後も人との関わりの中で新たなライフデザインを描き続ける能力を育成する。

☆ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」

・建学の精神である「報恩感謝」に基づき、いのちの尊さや人々の生き方や意義を尊重できるよう「いのち」や「くらし」を中心とした一般教育科目を履修させる。

・社会人としての教養や信頼関係の確立に必要な知識を身につけるため、「日本語表現法」「社会のあり方とマナー」等を卒業必修科目として履修させる。

・介護福祉士として、生活支援に必要な保健・医療・福祉などの専門科目を履修させる。

・福祉職として必要な実践力や応用力を習得するために、演習・実習などを積極的取りいれた授業を履修させる。

■高等学校

（１）教育内容・水準の充実

①１年生では、新学習指導要領を踏まえた新カリキュラムにそって教育を行いました。
新カリの各科目の「シラバス」を作成し、各教科の学習内容や到達目標を生徒に確認させました。生徒は評価方法も理解した上で、授業を受けることができました。

②１年生の特進文理コース、保育コースにおいては、土曜日も授業を実施し、授業時間を増やすことができました。今後、学年進行で土曜授業の週６日制を行い、さらに教育の充実を図ります。

③総合コースにおいて、キャリア教育を中心にすえた学習指導と生活指導の充実を図りました。しかし、高校３年間を見据えた計画立案が不十分でした。この反省を踏まえて、総合的な学習の時間を活用した３年間の計画を立て、キャリア教育を進めていきます。

（２）教育環境の充実

①第二飯盛嶺校舎の活用によって、総合文理コースと特進文理コースの文系・理系が行う分散授業のための小教室を確保することができ、生徒の教室移動時間短縮等の改善を行うことができました。

②体育館・運動場を整備したことにより、体育教育・部活動が一層活発になりました。昨年度の大阪高等学校総合体育大会女子総合優勝に続いて、本年度も同じく女子の部で優勝は逃しましたが、準優勝となりました。また、大阪私立高等学校総合体育大会でも女子の部で準優勝の成果を残すことができました。

③学習指導・会議・面談などの教育業務に対応できるよう、講師室・進路指導室・生徒募集室等の整備・改修を行いました。

④生徒数・学級数の増加に伴い、新たな教員採用を行いました。

（３）教育研究基盤の整備

①学内研修会では弁護士の方から学校危機管理等の法的対応についての講演を聞き、教員の資質向上に努めました。

②学外研修会への参加を奨励し、教育評価編成担当者研修・保育教育研究大会・食育研修会・人権教育研修会など、多くの研修に参加し成果を共有しました。

③教員の研修を図るため、図書・教材・備品等を整備するとともに、自己研鑽を奨励する等、個々の教員の資質向上にも努めました。

（４）社会貢献・文化活動の推進

①昨年度に引き続き、ある公立中学校２年生の生徒全員が来校し、授業を見学しました。さらに、その中学校出身の６名の高校生から高校生活についての話を聞きました。同様に、総合学習の一環として、昨年度より１校増え６校の地域公立中学校生徒を体験学習として受け入れました。

②地域公立中学校生徒の部活動交流会を積極的に支援するため、バスケットボール部は本校体育館にて中学校招待試合（畷カップ）を開催しました。

③吹奏楽部は８月と３月の年２回定期演奏会を開催しました。また、ＪＲ住道駅における人権週間係る街頭啓発活動の協力をはじめとし、地域の社会活動・イベントに積極的に協力しました。

（５）生徒募集対策

①生徒募集の厳しい環境の中でも安定的に生徒を確保できるよう教育内容の充実に努め、高校の特色・魅力を積極的にアピールできましたので、学校見学会へ参加者が増加し、年間参加者数は２，０００名という数字になりました。

②志願者１，７００名、入学者５００名の目標掲げていましたが、志願者については目標数を超えて１，７１８名（６年一貫と１．５次を含む）となりました。公立中学校との信頼関係を深め連携を強化できた結果と考えます。今後さらに教育内容の充実を図ります。

③目標８０名の内部進学者は、６７名（６年一貫を含む）に留まりました。なお一層、学園中学校との連携を強化し内部進学者の増加を図ります。

（６）内部進学

①大学進学者２０名、短大進学者１３５名を目標として進路指導の強化を図りましたが、大学は８名、短大は１２１名の進学にとどまり、次年度の課題となりました。

②理学療法専攻３名、作業療法専攻５名の計８名の進学にとどまり、高大連携の強化は次年度の課題となりました。

③短大の先生に高校で模擬授業を行ってもらい、ライフデザイン総合学科の授業内容についての生徒理解を深めたが、保育学科６２名、ライフデザイン総合学科５０名、総合福祉コース９名の計１２１名の内部進学にとどまりました。

（７）進路対策

①キャリア教育として、看護体験の希望者を募りました。総合コース３年の生徒に対して、昨年に引き続き大規模小売店の協力で就業体験を実施しました。保育コースの生徒が学園幼稚園の預かり保育に参加する、学園短大の「夏の保育祭」を見学するなど、学内の校園との連携を図りました。

また、夏休み中の地域での保育関係施設へのボラティア活動の奨励によって、学外での活動に参加するようになりました。

特進文理コースでは、勤労観や職業観の育成だけでなく社会的・職業的自立に必要な能力や態度を育てる機会となるよう、第１学年で職業体験を実施しました。

②一人ひとりの進路目標の実現をめざすため、外部講師による、進路説明会や分野別進路ガイダンスを計画し、就職・専門学校・短大・大学など、多様な進路希望に対応できるよう目標分野ごとで実施しました。

（８）災害対策への取り組み

①震災の折、現地で支援活動をされた看護師の方の講演を、第１学年の総合的な学習の時間に聞かせ、生命の尊さ・絆の大切さ・社会貢献の大切さを学ばせました。

②復興応援活動として昨年度に引き続いて、生徒会役員と吹奏楽部員が東日本大震災の被災地である宮城県女川町を訪問しました。震災を風化させないため、文化祭では女川町避難住民の方との交流会の様子などを展示発表しました。また生徒ができる範囲で復興を支援するため、文化祭では募金活動を実施するとともに、東北地方の物産販売も行いました。

③防災訓練を実施し、消防署の方からアドバイスをいただきました。今後、現行の防災マニュアルの充実と帰宅困難時対応の検討を行っていきます。

■中学校

事業計画を明確化し検証するシステムを構築しました。

建学の精神「報恩感謝」の下、基本的な生活習慣の確立、確かな学力を持つ生徒の育成に力を注ぎました。また、学校評価アンケートにより目標の達成度を検証しました。（５段階評価）

生徒の教育環境の充実と満足度の高い教育内容に取り組みました。
さらに、財政面においては入学生の増加と授業料の改定、諸経費の節約などにより健全な収支関係を目指しました。

生徒数は２２年度５２９名　/２３年度５３５名　/２４年度５４５名　/２５年度５６８名
/２６年度５８０名と増加しています。

（１）教育内容の充実

教育内容に関しては昨年度よりも全ての項目でアップしており、生徒・保護者の満足度が上がったと思われます。しかし目標値には達していない項目もあり、さらなる努力が必要と思われます。

○ 安心・安全な学校作りでは、いじめの対応が目標値（4.0）に達していません。

いじめに関しての事前指導は（保護者対象・生徒対象・教員対象）の講演会を実施しました。
特に見えにくい携帯電話による誹謗中傷の予防に力を注ぎました。

①いじめの無い人間関係・思いやり心の育成を面談や事前教育などで目指しました。

②施設面で危険の少ない学校を設備の点検や修理・補修で目指しました。

○ 教員みずから模範を示ように努めました。

目標値を 4.5 に設定し、自己研鑽に努めるようにしました。

①服装・挨拶・時間の厳守・言葉遣い・節約等で教師自らが模範を示しました。

②尊敬される教員を目指して、生徒との良好な人間関係を築きました。

○「学力のつく学習」の更なる実践を目指しました。目標値 4.3 以上に設定し教員・生徒共に目標値をクリアできるように頑張っています。

○各種検定（英語検定・数学検定・漢字検定）をさらに推進しました。
放課後や早朝に検定用の練習を行っています。

（２）基本的生活習慣の再確認と育成を行いました。

目標値４．０以上としています。保護者の数値はいずれも４.０以上ありますが、生徒は自分に厳しく基準を設定しているようで目標値に達していません。基本的生活習慣は全ての基本であり、学校でも家庭でも教育の最重点課題として取り組んでいます。

①挨拶の励行「おはよう会」朝終礼・クラブ活動における指導を充実しました。

②時間の厳守「ノー・チャイム運動」・授業開始時間を守る指導を充実しました。
③読書タイムの遅刻者への指導の充実を図りました。

④品位のある行動　マナー指導を充実しました。　（乗車・言葉遣い・服装等）

（３）コース別の目標を設定して充実を図っています。

①英数コース

勉強とクラブの活動の両立を目指し、私立・公立のトップ高校への進学を目指すコースです。講習・早朝テスト・習熟度別授業を実施しています。

②英数発展コース

終礼時の小テスト、３年時の土曜日６限授業実施し、私立・国公立の難関高校への進学を目指すコースです。

③６年一貫コース

中高６年一貫の６年間で有名国立大学への進学を経て、社会で活躍できる人材の育成を目指すコースです。

A. ２クラス編成ですが、26 年度より授業は教科別習熟度別クラス編成で学力に合った難易度での授業を行います。勉強合宿・放課後の自習学習で学力向上を目指しました。

B. 社会人による講座・自分プロジェクト・卒業論文・京都大学、大阪大学訪問で人生目標の設定・人間形成の充実を図りました。

上記の結果、人間力の育成と学力の習得が出来ていると思われます。

（４）具体的な実績

〇３年コース〔英数コース・英数発展コース〕２５年度の高校進学実績

高校合格実績は学園中学校の生命線の１つであり、良い結果を出すように努めています。

公立高校	北野	２名（文理 1）	大手前	４名（文理 3）	四條畷	１１名（文理 4）
	清水谷	２名（文理 1）	寝屋川	１名	教育大平野	１名

私立高校	灘	１名	大阪星光学院	１名	東大寺学園	１名
	愛光学園	１名	清風南海	２名	洛南	２名
	西大和学園	４名	同志社系	６名	関大系	７名
	明星	２名	大阪桐蔭	１４名	京都女子	９名
	近大付属	１３名	他			
	四條畷学園	７５名（ 専願	６４名	併願１１名）		

五ッ木模擬試験において、英数発展コースでは４年連続、３人に１人は偏差値７０以上に伸びています。

〇６年一貫コースの学力

ベネッセ学力推移全国模擬試験においてＳ１ゾーン〔超難関大学（東京大学）合格レベル〕３人に１人の生徒がＳ１ゾーン・Ｓゾーン・Ａゾーンに入るまでに伸びてきています。

（５）「実行から学べ」の教育方針のもと、体験を通して学んだ知識を使いこなせる能力を身につけるためクラブ活動の活性化と多彩な行事に力を注いでいます。

①クラブ活動の活性化…クラブ数は２１あり、９割以上の生徒がクラブ活動を行い、私学大会女子総合優勝などしています。
２２年度準優勝、２３年度優勝、２４年度準優勝、２５年度は３位でした。

②多彩な学校行事…体育会・文化祭・宿泊研修・修学旅行・スポーツ大会・遠足・水泳大会・耐寒ＯＬ・地下鉄ＯＬ・スキー教室などやニュージーランド海外研修などの体験を通して社会に出て役立つ能力を習得しています。

（６）２５年度より広報活動・入試制度の見直しを行い、改革を推進しました。

①広報活動…生徒募集方法の精選を行い、データーよりＨＰの充実などに重点を置きました。
６年一貫コースの広報に力を注ぎ応募者数を確保しました。

②入学試験関係…英数発展コースから６年一貫コースへの転科を新たに付け加えました。

③志願者数…小学六年生の児童減少、私立中学進学希望者の減少の傾向が続いていますが本校への志願者数・入学者数とも増加しています。

志願者数…２３年度２１７名/２４年度２４１名/２５年度２５０名/２６年度２６０名
入学者数…２３年度１８４名/２４年度１９４名/２５年度１９３名/２６年度１９９名

６年一貫コースの入学者数
２２年度２５名/２３年度３５名/２４年度４０名/２５年度３９名/２６年度５７名

（７）小学校・高等学校との連携強化を図り内部進学の増加に努めました。

①学園高校への入学者数２３年度３８名/２４年度４０名/２５年度６２名/２６年度６８名
２５年度より３年コースから６年一貫コースへの転科を認め、高校への進学者数の増加を目指しました。

②学園小学校からの入学者数２３年度７７名/２４年度６７名/２５年度６０名/２６年度６７名

連絡会を年４回以上行い、本年度は多くの成績上位者が内部進学を希望しました。
小学校の先生方の努力で学園中学校の良さが理解された結果だと思います。

（８）東日本大震災への対応と震災対策への取り組み。

①生徒会が文化祭などでの物品販売活動の売上金 111,246 円を南相馬市へ寄付しています。

②南海トラフ地震の対策として避難訓練、帰宅困難児童への対応の充実を計画し、実施します。

③２６年度より修学旅行（３年コース）を東北地方に戻し東日本体震災の教訓を学ぶと同時に地震に対する啓発学習を行います。

■小学校

四條畷学園小学校の教育

（１）教育のめあて

①真理探究・価値観の構築・自主性の確立

考え深く正しい判断のもとに、しっかりした行動のできる子どもをつくります。

②基礎学力の徹底、研究態度の養成

たしかな力を身につけ、熱意をもってものごとに取り組む子どもをつくります。

③個人の尊重、集団の育成

つねに明るく前向きに、みんなといっしょに伸びようとする子どもをつくります。

④礼儀と品性

自らの行動を、省み律することのできる子どもをつくります。

（２）教育指針

①基礎学力の徹底

学習に自信を持たせるよう配慮し、意欲的態度や実行力の基礎を養います。

②個性の尊重

一人ひとりの興味関心を大切にし、だれにも自信を持たせます。

③実行力の尊重

子ども自身の活動を重んじ、実行を助け、その結果を常に振り返るように指導します。

④学習内容の精選

子どもの成長の糧となるもの、時代の要請に答えるべきものを見極め、「何をこそ学ばせるべきか」を熟慮探究します。

⑤自律の手助け

「何を」「どの機会に」しつけるかを熟慮し、規範を示すことにより、生涯にわたる自律の意識を育む指導を行います。

⑥集団活動の充実

意識的に縦割り集団を組織したり、グループ活動を取り入れたりして「みんなでいっしょに」「高学年を敬う」「低学年を育む」を常に考えさせます。

⑦幼稚園・中学との円滑な接続

幼稚園や中学校とのつながりを密にし、相互の教育内容を充実させることで、長期にわたる同じ方向性を持った指導を行います。

⑧命を守るための取り組み

自他の命を尊び、安全なくらしを希求する態度を育てるとともに、緊急時の対応を検討することにより、校内の安全性を高めます。

（３）本年度重点目標とその指針

①基本的生活習慣の育成

規律遵守の意識レベルの向上を図りました。学校全体としてみた場合、児童の意識は昨年度に比べ向上しましたが、個人、あるいは学年単位でみると、まだまだばらつきがあります。これからも継続的に指導を続ける必要があります。

(a)「自律の手助け」を念頭に置き、「しつけポスター」を指針として家庭と学校が協力し、指導を行いました。

(b)挨拶、言葉づかい、時間遵守、校内美化、食事マナー、授業中の姿勢、身だしなみなど、教員が範を示して児童が見倣うことのできる機会を増やしました。

(c)自己評価と学級担任による評価を併用して、マナー向上を数値化し、児童のやる気を促しました。

(d)登下校のマナー向上のため、職員が交替で四条畷駅に行き、児童の直接指導に当たりました。

(e)食事マナー向上のため、職員が交代で食堂に行き、児童の直接指導に当たりました。

(f)通学マナーの改善が見られない児童、恒常的に遅刻する児童は家庭に連絡し、協力を要請しました。

(g)児童自身が校内のマナー向上策を考え、実行に移せるような環境を整備しました。

②基礎学力の徹底と指導力の向上

国語の観点のうち、「書く能力」の向上を図りました。「書き、まとめる」「書いて考える」「書いて交流する」授業プランを開発、改良し、複数の教員が授業化することによりプランの質的向上を図りました。その結果、基礎学力の向上につながりました。

(a)「書くこと」を意識した授業を全カリキュラムに導入し、児童の書いたノート、WS 類を校内研究会で研究の対象とし、方法や成果を検討しました。

(b)統一確認テスト等の学力テストで、基準とする値に達していない児童を抽出し、学級担任および学年補助教員が対象児童の学力向上に努めました。次年度の学力テストでその成果を再び調べ、担任等の指導方法が有効であったかを考察しました。

(c)昨年度実施した公開授業研究会（平成２５年１月２６日開催）の評価を分析し、今後の研究深化に役立てました。

(d)指導力向上をめざし、指導要領にプラスした独自性のある学習プログラム開発、授業力錬磨をめあてとした教員研修の積極的参加を奨励しました。

③成績通知の充実

やる気を持たせるための、分かりやすくきめ細やかな成績通知方法を検討しました。その結果、児童と保護者の満足度が向上しました。目標値に達しましたが、さらなる努力を続けます。

(a)保護者と児童に学習到達度を継続的でわかりやすく通知できているかを分析し、成績通知の様式と方法を改良しました。

(b)カリキュラムのうち、独自性の強い内容を取り上げて、学校だより等の配布物や、成績面談等の話し合いの機会を利用して説明を行いました。わかりやすい説明を心がけ、保護者のいっそうの理解を図りました。

（４）本年度学校マネジメントの重点目標とその指針

見学会や説明会の充実をはかりました。本年度の志願者は、１０９名で、入試の結果、９９名の入学者になりました。募集定員を充足しました。

①募集活動の充実と強化

(a)児童募集活動の課題を抽出し、その対策を検討しました。

(b)入学を検討している保護者に対する、校内外入試説明会・塾説明会・体験授業の方法を検討しました。

(c)広報媒介を検討しました。

(d)外部から入学を希望する保護者への説明を再検討しました。

②幼稚園・中学校との連携強化

内部進学者を安定的に確保するために連絡会や協議会を開催しました。特に四條畷学園中学校に内部進学できるように改善を加えました。さらに中学校との協力を強化して対策を実行します。

(a)幼稚園との連携

A.連絡会・協議会などを通じ教師間の相互理解と交流を深めました。

B.保護者対象の公開授業や説明会を実施しました。

(b)中学校との連携

A.連絡会・協議会などを通じ教師間の相互理解と交流を深めました。

B.中学校の連携を強化し、内部進学数の増加に努めました。

C.内部進学の進路指導を強化しました。

③防災及び危機管理に関する取り組み

震災や火災から児童の生命を守るために、以下の対策に取り組みました。

(a)一般防災に関する対策

A.火災、地震等の防災係を組織しました。

B.防災マニュアルを作成し、マニュアルに沿った避難訓練を行いました。

C.マニュアルが機能するよう、避難通路や防災用具を定期的に点検しました。

D.緊急集団下校マニュアルを作成し、円滑な保護者への引き渡しを目的とした訓練を行いました。

E.緊急時の一斉配信システムを整備しました。

F.宿泊を伴う校外行事では、最初に避難経路を児童に知らせ、必要に応じて避難訓練を行いました。

(b)不審者等の危機管理

A.不審者対策危機管理マニュアルを作成し、児童に危害が及ぶ危険性を段階的に設定（危機レベル）しました。

B.危機レベルごとの迅速な対応ができるよう、職員の訓練を行いました。

④教育環境の充実

学校の美化に取り組みましたが、まだ目標に達していません。引き続き、重点課題として取り組んでいきます。

(a)個人の持ちものの整理整頓を行いました。

(b)職員室の機器管理を行い、業務の効率化を行いました。

■幼稚園

（１）重点取組事項

①生活習慣

(a) 躾教育の実施

入園前の幼児を対象としたプレスクール経験の年少児が８割以上もいることから比較的早くから社会性が身につき集団生活に慣れ親しむ事ができました。

幼稚園生活に於いて重要となる生活習慣が正しく身につくように、教職員同士が意見交換仕合い意識を統一して取り組む事ができました。

また、保護者にも毎月園便りなどで躾の大切さを知らせていき協力を促しました。結果、「自分の事は自分でする」「靴を揃える」「挨拶をする」「服をたたむ」「整理整頓をする」「片付けをする」などが学年毎の目標はほぼ達しました。

(b) 課題

挨拶は来客者に対して恥ずかしさからかできていない事が多いので、誰に対しても挨拶する事の大切を伝えていき、教職員が手本となるよう取り組んでいきます。

公共の場でのマナーの徹底を心掛けました。特に登降園中の電車、バスの待合場所や車中では静かにして「人に迷惑をかけない」大切さを子ども達に繰り返し伝えて、引き続き教職員の言葉がけが必要です。

また、一般の利用者の方から保護者のマナーについてご意見を頂く事もあり、更に教職員の意識を高めていく事が重要と考えます。

②正課

全員が可能な力を発揮できるように学年や個人毎に目標を明確にして見直しをしながら教職員が意識向上に努め考慮しながら進めていった結果、クラスや個人のレベルアップに繋がり目標を達成する内容が増えました。

ステップアップ会議や園内研修会で話し合いを密にして、時間のかかる子に対して特にその子にあった環境を早く見つけ全教職員で協力して取り組みました。また、保護者に幼稚園での子どもの様子や成果を報告し、共に成長を実感することができました。

（２）教育内容・水準の充実

①正課の充実

種目毎に目標達成時には教職員が取り組めた子どもをみんなの前で称えたりまた表彰の場を設けたりして全員の前で褒める事によって、一人ひとりの子ども自身の意識が変わり「あの子のようになりたい」「もっとやりたい」という喜びの気持ちを持ち楽しんでする意欲が一層高まり、子ども自身が進んで目標をもって自分の課題に取り組むことができるようになってきました。

(a) ピアニカの指導レベル向上

ピアニカは年少児の早い時期から簡単な曲目を選び子ども達自身から楽しみながら進んで弾けるように取り組んできました。その結果年中児や年長児になると昼休みなど利用して、いろんなクラスや先生のところへ行き披露するまでになりました。

また、２月の発表会では年長児のピアニカ演奏は低音高音のパートに分かれての曲目を披露しその素晴らしさは絶賛するほどでした。楽器演奏もどの子もたくさんの楽器に触れ音楽の楽しさを学びました。

さらにみんなと一緒にする事で協調性や自分の役割を果たすという責任の概念も経験できたのではないかと思います。ピアニカ演奏や合奏は音楽に親しむだけではなく人間として大切な事を培うのが目的です。

(b) 集団生活

人との関わりが少なくなってきている現状の昨今、人として大切な事を習得するには、人との出会いの場を多くする事が必要と考えます。同年齢の子ども同士が触れ合う機会は一番よい影響を受けます。また、異年齢との遊ぶ機会からもいろんな事を学びます。

学園幼稚園では、異年齢と接する機会の場、例えば年長児は４月入園当初の年少児の世話をするお手伝いに進んで参加しています。また園全体で見学会及び入園説明会や一日入園では保育の見学だけではなく来園者親子の保育参加を呼びかけ、人と関わって温かいおもてなしができるように心掛けました。

預かり保育では自由保育や設定保育を取り入れ、異年齢での活動からも学ぶことができるようにしています。

通常保育でもクラスの枠を越えた交流の機会も設けています。年少児が年長児の体操をする様子を見て憧れ、年中児同士が見せ合って競い、自分も早くできるようになりたいという思いが募ります。
子どもを通してできるようになりたいという気持ちを持たせることが大切です。

園外保育などの体験学習も重視しています。ザリガニ釣り、プラネタリウム、芋ほり、秋の遠足、みかん狩り、おわかれ遠足を通して自然や身近な動植物に親しみを持ち、好奇心や豊かな心が育つように配慮しました。

また、勤労感謝の日には手作りの花束を制作して駅員さんに渡す機会を設け、社会ではたくさんの人が働いている事を知り感謝の気持ちを持てるようにしました。

（３）研究活動の充実

①教育環境の充実

(a) 図書の購入

幼稚園では「読み」を重視しています。幼児期に絵本を読む機会を多くして習慣付け読書意欲を高めるように努めました。みんなの前で大きな声を出して読むことや話の内容を発表する事も取り入れて、子ども達が親しみを持って読みまた小学校低学年程度のレベルの

高い図書を揃えました。

子ども達の読みの意欲を高めるためにご褒美の漢字カードも豊富に揃えました。また、今年は１，０００冊程度の図書を購入しました。
２５年度年長児の最高購読冊数は５，０００冊を超える子どもが２名いました。

(b) 体操用具の購入

各保育室や廊下でも手軽に安全に持ち運びができて体操の練習ができるように、また、寒さ対策にもなるジョイントマットを増やしました。

(c) トイレの美化

トイレの衛生と美化を目指し、トイレ利用の指導を各担任が行いました。また、きれいに使えるように図示でわかりやすくして、子ども達の意識を高めました。衛生面では除菌マットを使用して清潔と美化に配慮しました。
除菌マットの使用は保護者の方から衛生面で好評を得ました。

（４）教育・研究設備

①全学年会議、学年会議、ステップアップ会議、園内研修会の活用

(a) 学年主任を中心とした学年会議での経験豊富な細やかな配慮の指導、できるまでに時間のかかる子どもへの対応を密に話し合うステップアップ会議に加え、園内研修会では個々に子ども達の意欲を高める手作り教材の研究をし、指導方法の確認など教職員同士で探究し合って、その子にあった環境を早く見つけ保育に活かす事ができました。

全学年会議や終礼では、種々の諸問題を議論し情報を共有する事により問題点のスムーズな解決を図ると共に教職員の能力向上にもなりました。

(b) 体操指導の実践

毎月２回、幼児体操の専門家から体操指導を受け実践をし、教職員による「昼練」を通して体操指導等のスキルアップに努めました。

（５）社会貢献・文化活動の推進

①エコキャップ運動の継続的実施

子ども達が自ら進んで集めたペットボトルのキャップは、たくさんの人の命を救えている事を学びました。些細な事ですが今後も継続的に取り組んでいきます。
２５年度は７５人分のポリオワクチンになりました。

②早朝預かり保育・預かり保育

平成２４年９月から引き続き２５年度も早朝保育、預かり保育とも土曜日も行い、時間も６時３０分（土曜日は２時３０分）まで延長したことにより保護者から大変喜ばれています。

更に２５年度は９月より水・土曜日の参加者の希望による給食手配も可能になり保護者は満

足されています。人数多い水曜日の給食は１３０人中４０人が給食を利用しています。この事は園児募集に寄与しています。

２５年度も引き続き預かり保育を実施しました。述べ１５，６８０人が参加しました。

③日本の伝統文化の理解

２４年度に引き続き２５年度もお茶会、餅つき、豆まき等日本の伝統文化に接する事ができる行事を実施し子ども達が体験しました。体験を通して文化や歴史に興味や関心を持つ事に重視しています。

（６）園児募集対策

①プレスクールの充実

入園前の２歳児教室のプレエクササイズ・プレイングリッシュ・プレハーモニーの各教室の人数はほぼ定員を達しました。この参加から入園の募集に繋げていくために、特にエクササイズでは幼稚園の教職員で実施する場合、基本的生活習慣や技能がつくように内容を初期の年少児の保育に近づけるように努めました。

３月には次年度に向けてプレエクササイズの一日体験を募り実施しました。７５人の参加がありました。

後期プレエクササイズ受講児は、当幼稚園のアドミッションポリシーに合致する場合は優先的に受け入れることとします。

②一日入園の充実

２４年度に引き続き２５年度も入園の決まった幼児を対象とした一日入園を実施しました。親子で楽しんで保育活動に参加して頂ける内容を一層工夫し、新入園者の幼稚園理解に繋げていきます。

③見学会・説明会の充実

２４年度に引き続き２５年度も普段の保育を見学して頂き、保育にも自由に参加できるように活動内容を配慮しました。在園児と共に喜んで楽しんで一緒にできる手遊びやかけっこは好評を得ています。今後も楽しい企画でおもてなしに努めていきます。

④内部進学

内部進学者を安定的に確保する事と学園小学校のアドミッションポリシーを幼稚園教諭が理解するために、小学校との話し合いを実施しました。

学園小学校のアドミッションポリシーに園児全員がその目標を達成できるように、基本的生活習慣の習得・基本的な技能の習得・たくさんの体験や感動ができる教育の充実に努めました。

（７）防災・防犯対策への取り組み

①防災教育

定期的に防災訓練（地震・火事等）を実施し、訓練に参加する大切さを知らせていき子ども達の理解を進めました。防災訓練では災害への意識を高め、訓練時において非常食のアルファ米の試食も実施しました。３月末のヘルメットの購入により２６年度は着用して取り組む予定です。

②防犯教育・安全対策

安全対策マニュアルが実際において機能するように不審者への初期対応、警察官からサスマタの使用訓練の指導を受けました。また、子ども達は連れ去り防止について寸劇を見ながら詳しくわかるように説明を受けました。

③ＪＲ出張授業

年長児を対象に、電車に関するマナー全般を寸劇と身近な用具を利用して子ども達に理解できるようにして説明を受けました。２６年度は年中児も受講を予定をしています。

（８）その他

①中学生体験学習の受け入れ

幼稚園児と中学生が関わりあって遊び、お互いに慣れ親しみそれぞれの特性を感じて付き合い方を知る手立てとなりました。また、中学生にとって小さい子を愛おしく思う気持ちも育み自分のなりたい職業の夢が膨らむように今後も受け入れの体制を整えていきます。

３．平成２５年度決算の概要

平成２５年度決算の概要を前年決算との対比で、以下の通り説明します。

（１）消費収入について

①学生生徒納付金

授業料は、高校・中学・小学校の生徒数が増えたため、約７０百万円増となりましたが短期大学の学生減により、３９百万円減、大阪府の就学支援補助金が３年目となり対象が高校生全体（１～３年生）となり７２百万円となったことなどにより、全体で４３百万円の減少となりました。

＊就学支援補助金については、授業料に計上せず、補助金として計上するために授業料の減、補助金の増となります。

入学金は、短期大学の入学者数減等により、２２百万円減少しました。

②補助金

国庫補助金は、平成２４年度の特殊要因（高校本館等の空調設備更新に伴う省エネ補助金１６百何円）が無くなったため、１６百万円の減少となりました。

地方公共団体補助金は、高校生の増加により４１百万円、大阪府の就学支援補助金が３年目となり、対象が高校全学年となったため７１百万円増となったことにより１１１百万円の増加となりました。

③資産運用収入

運用残高の減少及び運用利回りの低下により１０百万円減少しました。

④資産売却差額

資資産売却差額は１５百万円の減少となりました。

⑤事業収入

高校ＡＰＥＸコースの留学費用等の補助活動収入減等により９百万円減少しました。

⑥雑収入

退職者増に伴う退職金財団からの交付金収入増等により３６百万円増加しました。

（２）消費支出について

①人件費

教員人件費が６年一貫コースを含む高校教員の採用増等により８３百万円増加しました。また、退職者増により、退職金が３６百万円増加したことなどにより１２８百万円増加しました。

②教育研究経費

幼稚園建替えに伴う園舎解体費３０百万円、仮園舎の減価償却３２百万円などの計上により、６３百万円増加しました。

③管理経費

大学のホームページ更改に伴う業務委託費用の発生などにより１４百万円増加しました。

④資産処分損

幼稚園舎建替えに伴う園舎除却等により、建物処分差額・構築物処分差額が発生し、資産処分差額は２１０百万円増加しました。

以上より、平成２５年度の消費収支は３６８百万円の支出超過となりました。

２５年度　消費収支計算書

平成25年　4月 1日　から
平成26年　3月31日　まで

1.消費収支の予算比較　　（単位　千円）

	消費収入の部 科目	25年度決算 (E)	25年度2次補正予算案 (F)	差異 (E)-(F)	24年度決算 (G)	差異 (E)-(G)
1	学生生徒等納付金	2,296,508	2,272,200	24,308	2,362,866	△ 66,358
2	授業料	1,900,164	1,875,300	24,864	1,943,752	△ 43,588
3	入学金	270,850	271,000	△ 150	292,710	△ 21,860
4	実験実習料	82,069	82,500	△ 431	82,829	△ 760
5	施設設備資金	43,425	43,400	25	43,575	△ 150
6	手数料	53,990	52,900	1,090	52,593	1,397
7	寄付金	10,929	10,700	229	11,010	△ 81
8	補助金	1,124,127	1,116,700	7,427	1,032,725	91,402
9	国庫補助金	97,358	95,000	2,358	113,327	△ 15,969
10	地方公共団体補助金	1,026,769	1,021,700	5,069	919,398	107,371
11	資産運用収入	50,761	48,300	2,461	60,289	△ 9,528
12	資産売却差額	13,217	12,500	717	27,816	△ 14,599
13	事業収入	96,465	97,000	△ 535	105,380	△ 8,915
14	雑収入	70,739	70,300	439	34,762	35,977
15	帰属収入合計 (A)	3,716,736	3,680,600	36,136	3,687,441	29,295
16	基本金組入額合計	△ 767,241	△ 769,700	2,459	△ 412,640	△ 354,601
17	消費収入の部合計 (B)	2,949,495	2,910,900	38,595	3,274,801	△ 325,306

	消費支出の部 科目	25年度決算 (E)	25年度2次補正予算案 (F)	差異 (E)-(F)	24年度決算 (G)	差異 (E)-(G)
20	人件費	2,564,596	2,567,100	△ 2,504	2,436,468	128,128
21	教員人件費	2,089,948	2,092,200	△ 2,252	2,006,770	83,178
22	職員人件費	360,321	360,600	△ 279	350,512	9,809
23	役員報酬	26,469	26,500	△ 31	17,840	8,629
24	退職金	46,027	46,000	27	10,106	35,921
25	退職給与引当金繰入額	41,831	41,800	31	51,240	△ 9,409
26	教育研究経費	1,046,901	1,035,700	11,201	983,360	63,541
27	（うち、減価償却額）	427,357	431,500	△ 4,143	403,885	23,472
28	管理経費	221,950	234,500	△ 12,550	208,141	13,809
29	（うち、減価償却額）	16,177	16,200	△ 23	15,865	312
30	経常支出の部合計 (C)	3,833,447	3,837,300	△ 3,853	3,627,969	205,478
31	資産処分差額	254,531	232,700	21,831	44,228	210,303
32	徴収不能引当金繰入額	140	100	40	1,119	△ 979
33	〔予備費〕	0	10,000	△ 10,000	0	0
34	消費支出の部合計 (D)	4,088,118	4,080,100	8,018	3,673,316	414,802
35	当年度消費収入超過額 (B)-(D)	△ 1,138,623	△ 1,169,200		△ 398,515	
36	基本金取崩額	659,843	585,800	74,043	420,315	239,528

40	帰属収入−消費支出 (A)−(D)	△ 371,382	△ 399,500	28,118	14,125	△ 385,507
41	帰属収入−経常支出 (A)−(C)	△ 116,711	△ 156,700	39,989	59,472	△ 176,183
42	減価償却費・資産処分差額等　差引前収支	326,823	291,000	35,823	479,222	△ 152,399

貸 借 対 照 表

平成26年 3月31日

（単位 円）

[資産の部]			
科　　目	本年度末	前年度末	増　減
固定資産	11,493,505,162	11,086,820,018	406,685,144
有形固定資産	8,605,239,219	8,465,540,606	139,698,613
土地	364,003,596	364,003,596	0
建物	6,934,242,810	7,313,249,787	△ 379,006,977
構築物	272,663,115	314,512,064	△ 41,848,949
教育研究用機器備品	178,076,672	225,931,668	△ 47,854,996
その他の機器備品	20,704,862	28,052,162	△ 7,347,300
図書	221,648,163	219,791,328	1,856,835
車輌	1	1	0
建設仮勘定	613,900,000	0	613,900,000
その他の固定資産	2,888,265,943	2,621,279,412	266,986,531
有価証券	2,227,134,071	1,962,868,950	264,265,121
退職給与引当特定資産	611,150,576	598,429,166	12,721,410
保険積立金	49,981,296	49,981,296	0
長期定期預金	0	10,000,000	△ 10,000,000
流動資産	2,094,213,566	2,709,054,547	△ 614,840,981
現金預金	1,647,582,302	1,934,856,784	△ 287,274,482
未収入金	55,122,593	35,536,393	19,586,200
貯蔵品	226,595	87,030	139,565
有価証券	298,718,964	654,298,038	△ 355,579,074
前払金	19,348,501	13,740,061	5,608,440
立替金	200,000	200,000	0
仮払金	3,200,000	4,316,000	△ 1,116,000
修学旅行費預り預金	69,814,611	66,020,241	3,794,370
資産の部合計	13,587,718,728	13,795,874,565	△ 208,155,837

[負債の部]			
科　　目	本年度末	前年度末	増　減
固定負債	611,150,576	598,429,166	12,721,410
退職給与引当金	611,150,576	598,429,166	12,721,410
流動負債	709,190,074	558,690,054	150,500,020
未払金	155,388,255	46,245,138	109,143,117
前受金	447,289,550	412,791,350	34,498,200
預り金	36,839,994	33,669,095	3,170,899
修学旅行費預り金	69,672,275	65,984,471	3,687,804
負債の部合計	1,320,340,650	1,157,119,220	163,221,430

[基本金の部]			
科　　目	本年度末	前年度末	増　減
基本金	15,441,421,141	15,334,022,909	107,398,232
第1号基本金	15,210,421,141	15,103,022,909	107,398,232
第4号基本金	231,000,000	231,000,000	0
基本金の部合計	15,441,421,141	15,334,022,909	107,398,232

[消費収支差額の部]			
科　　目	本年度末	前年度末	増　減
翌年度繰越消費収支超過額	△ 3,174,043,063	△ 2,695,267,564	△ 478,775,499
消費収支差額の部合計	△ 3,174,043,063	△ 2,695,267,564	△ 478,775,499

科　　目	本年度末	前年度末	増　減
負債・基本金・消費収支差額の部合計	13,587,718,728	13,795,874,565	△ 208,155,837

学校法人 四條畷学園